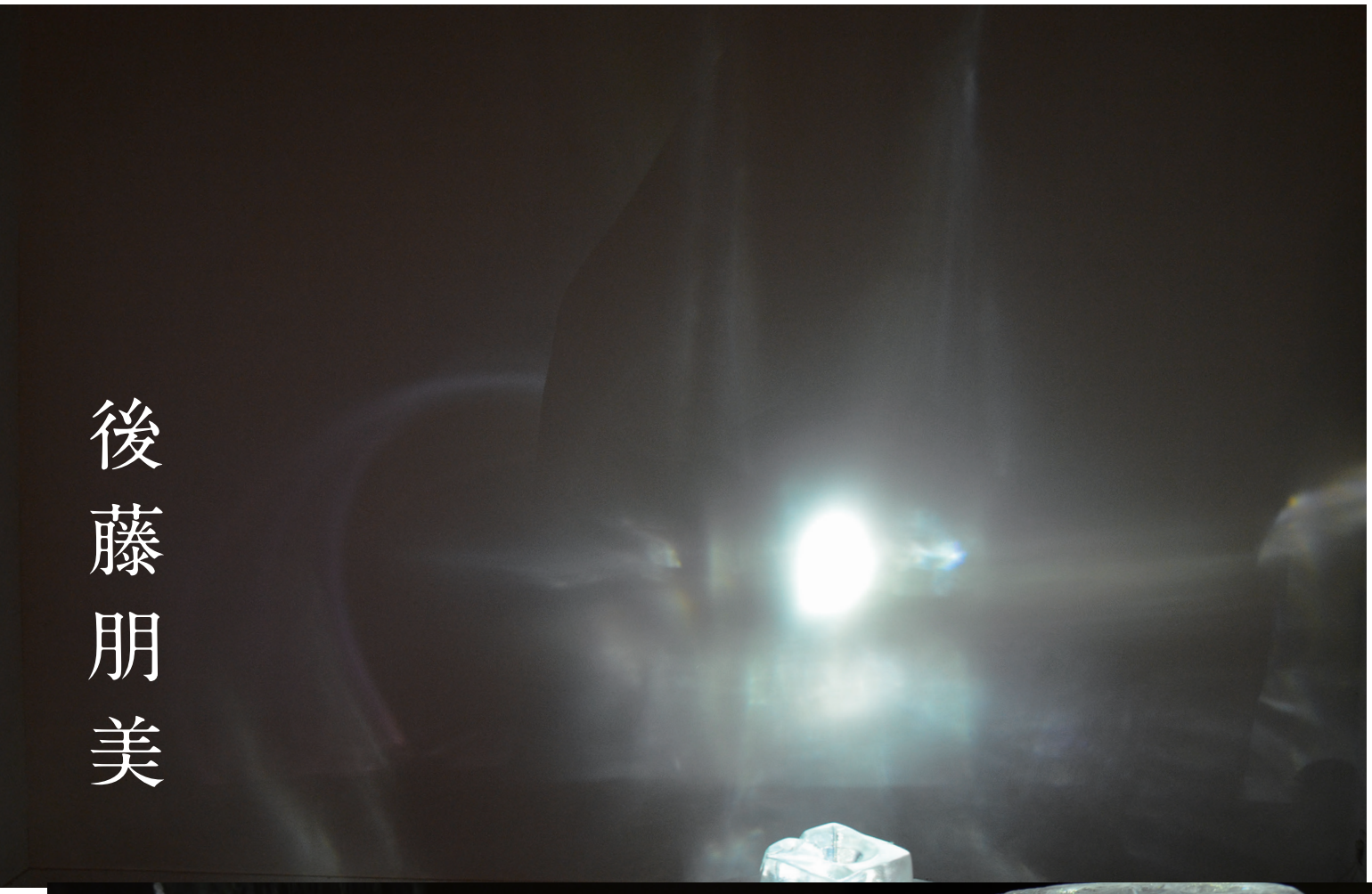

後藤朋美

触れることができる間に

2019/1/19 - 3/10

変わり続けることによる不変の表れを。すべてとすべてのかけらのなかで、つかむことはできるのだろうか。
ただ、私は存って成る。

(c) Tomomi GOTO text & photos 2019

vol.32 ya-gins
20190119-20190310

ya-gins vol.32 後藤朋美展『触れることができる間に』特別企画

パフォーマンス × ハプニング

後藤朋美

「形態は変わり続けながら、
存在そのものは変わらずに在るもの」

特別出演

加藤アキラ

「消滅するプロセス」

Special event

2019
3/3 sun
14:00～

２０１７年から氷と映像を使ったインスタレーションを発表している後藤朋美は、本展で新たな素材を加え新作を発表する。その日の温度や時間によって変化していく展示は、ひとつの有機体の様にギャラリー内の様相を柔らかく変化させ続けていく。

２０１８年、後藤朋美は加藤アキラとの会話の中で、加藤アキラが氷を使ったハプニングをしていたことを知ることになる。それは１９６９年、前橋の煥乎堂ギャラリーで開催されたNOMOグループ展『プラン１　消滅するプロセス（加藤アキラ）』※注１での、氷を使ったハプニングだった。このハプニングの発想のきっかけは、当時のアメリカとソ連の冷戦がヒントだった。この時の詳細な記録や資料は現存していない。そのタイトルの様に、その場に立ち会った者たちの記憶の中にのみ、存在するのだ。

本年３月、50年の時を超えて、ここya-ginsで「消滅するプロセス」を行う。

偶然にも同じ氷という素材を使ってハプニングを行っていた加藤アキラに触発され、後藤朋美も今回初のパフォーマンスでコラボレーションをする。

※注１
「消滅するプロセス」
１９６９年11月に、「NOMOグループ展『プラン１　消滅するプロセス（加藤アキラ）』、『プラン２　平衡感覚の喪失（島田武代士）』（参加・金子英彦、角田仁一、加藤アキラ、森康雄、島田武代士）が煥乎堂ギャラリィで開かれた。NOMOグループの展覧会が県内の画廊で開かれたのは、事務局を置いたやまだ画廊とコーヒー袋にアートした高崎の茶房あすなろ以外では、ここだけである。煥乎堂ギャラリィで群馬NOMOグループの展覧会が開かれたことは、NOMOグループの活動がある意味で認知された証と見てよいのであり、奇遇とはいえないだろう。しかし、それと同時にNOMOグループはこの展覧会を最後に、１９７０年以降はグループとしての活動を行っていない。
ー吉田富久一著「群馬における戦後、前衛美術運動の軌跡と行方（群馬県立女子大学特別研究 調査・報告書２０００年）」より引用

加藤アキラ　Akira KATO
１９３７年高崎市生まれ。１９６５年「第１回群馬アンデパンダン」展に出品。群馬NOMOグループに加入。１９６６年「第10回 シェル美術賞展」佳作受賞。１９６９年「第４回ジャパン・アート・フェスティバル」優秀賞（通産大臣賞）を受賞。１９８９年「RASENDO SPIRITUAL REJOICE　加藤アキラ　田中泯　立体作品と舞踏」（RASENDO、群馬）。２０１３年「アーツ前橋開館記念展　カゼイロノハナ」（アーツ前橋）、２０１７年「加藤アキラ　孤高のプリコルール」（アーツ前橋）など。

後藤朋美　Tomomi GOTO
１９７６年前橋市生まれ。金色の粒子に包まれるかの様なドーム型の作品。氷や光、自らが製塩した海塩などを用いたインスタレーションなどを発表。Plutinum（gallery trax、2010）、20周年記念関連ワークショップ「音の花束」（東京都現代美術館、2015）、「表現の森」（アーツ前橋、2016）、吉本ばなな氏著書『おとなになるってどんなこと？』の装画・挿画など、多岐に渡って活動中。

後藤 朋美『触れることができる間に』　会期　2019年1月19日 - 3月10日　open 毎週 金・土・日 13:00 - 20:00
場所　ya-gins（前橋市千代田町3-9-2 弁天通りアーケード内）

ya-gins
[mail] yagins2012@gmail.com